アルケミーワールド2.0

ゲッペル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルケミーワールド２．０

【Ｎコード】
Ｎ０７１８Ｐ

【作者名】
ゲッペル

【あらすじ】
錬金術師と人造人間の世界に、剣の世界の方から来た異物が紛れ込んだ模様です。

脳内のファラリス様が『汝の為したいように為すがよい』と仰せになられたので始めてみました。

本作品は、「鋼の錬金術師」の二次創作・オリジナル主人公物で、時間軸はユースウェルからトレインジャックの間に捏造した部分か

ら始めまります。主人公は、「ソードワールド２・０」の魔法使い兼神官の能力を軸に旧版ソードワールド等々が混ざったごっちゃ煮で構成されております。
今まで、小説など書いたことなどなかったので、いろいろと酷い物になりますが、よろしくお願いします。
※更新は完全不定期です。

序章

人間というものは、か弱い生物である。……
その脆弱な生物は、「火」を操ることによって、「闇」を駆逐することに成功した。……
それから長い時を経て、人間は、「軌道式蒸気機関車」を発明することによって「距離」という敵を打ち倒したのである。～ジョセフ・カーウィン著『流通の革命』より抜粋～

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

石炭の煙を竜のごとく靡かせて、汽笛を雷かのように轟かせながら大地を往く鋼鉄の箱は、まさに文明の象徴で御座います。それは、鉄道が人や物資をどしどし運ぶことで、工場は稼働し店先には商品が並ぶことから言えるでしょう。

しかし、その国家の大動脈とでも言うべき鉄道の運行が止まることがございます。その理由は天災から職員のストライキ等様々なものが存在いたしますが、ここアーカストニックの街から少し離れた場所に汽車が停止しているのは、故障が原因のようで御座います。

なぜ、そんなことが解るのかと申しますと、車体の所々から蒸気を漏らしている姿を見れば火を見るより明らかで御座います。

この地域は、所謂「辺境」と呼ばれる地域なため替えの汽車など御座いません。イーストシティやニューオプティンの駅に問い合わせても「我ニ余剰車両無シ、中央へ連絡セヨ」と言われる始末。

確かに、セントラルにならあるでしょう、しかし、中央に連絡して替えの汽車なり何なりが来るには三日ほどかかります、このままでは運賃の返還も已む無し、と車掌が考えていたその時でした、ふと目に入ったのはこの列車の乗客名簿、そこに、ある「有名人」の名を発見した彼は、藁にもすがる思いで、客車の方へ歩いて行くので御座いました。

さて、車掌が見つけた「有名人」とは誰だったのでしょうか。有能

な修理工？いや、例え修理工が一人居たところで直せる物では御座いません。ならば自分の汽車でも持っている、ブルジョアジー？そのような人は、そもそもこの辺りには来る必要が御座いません。そして、車掌が見つけた人物は、技術者ではないがそれに劣らぬ技を持ち、ブルジョアジーではないが、金銭的苦労が無い人で御座いました。

暫くして、車掌は奇妙な二人組の前で立ち止まりました。奇妙というのも、片方の少し背の低い金髪の少年は、少々派手な赤いコートを着ているだけですが、その相方とおぼしき人物が、全身鎧を着こんだ大男であるのに、兜から聞こえる声は少年のそれとなれば、誰しもが考えることで御座います。

そうこうしているうちに、車掌と例の二人組は、機関車の横まで歩いて行き、二言三言話をしておりました。　すると、鎧の男がおもむろに地面に円やら三角形などを描き始めました。そして、その描いた図形に両手をかざしたところ、〝どん〟という音と共に土煙が立ち込めたではありませんか。

しかし、驚くのはここからで御座います。

土煙が立ち込める前の機関車は、故障の箇所以外にもあちこちに老朽化の兆しが、見えておりましたが、なんということでしょう、煙が晴れ再び露になったその姿は、たった今工場から出てきたような新品同然な姿をしているではありませんか。

そう、この奇跡の業こそが、この国に伝わりし秘術「錬金術」なので御座います。

序章その2

『さてと、こんなところかな？』
「おお…汽車が復活した…有り難う御座います！さすがは＞鋼の錬金術師＜様ｄ……の弟君で御座いますな！」
「おいオッサン、なんで今口ごもった」

アーカトニックの街から少し離れた荒野で、一台の機関車が徐行運転をしている。何も知らない人ならば、何故このような速度で走っているのか疑問に思うだろう。しかし、この機関車は、ほんの数分前に車体から蒸気を漏らしていたのを、乗客の一人である鎧の男に、錬金術で修理をしてもらったばかりなのだから仕方が無い。

鎧の男の名前は［アルフォンス・エルリック］と言う。
そして、彼が兄と呼ぶ人物（端から見れば、親子と見間違えるほどの身長差があるが）こそ最年少国家錬金術師として有名な＞鋼の錬金術師＜［エドワード・エルリック］なのである。（ちなみに、車掌の名前は…え？そんなものには興味が無い？）

「これで、アーカストニックには1日停車するだけで済みます」
「しかも無視かよ…って、1日は停車するのか？」
「はい、大事を取って車両点検はしておこうか、とおもいまして。宿泊施設の手配は此方で致します」
「まぢで？」
「モチのロンで御座います」
「今の時刻は？」
「午前９：５０で御座います」
「点検が終わって出発できるのは？」

「明日の午後２：３０ぐらいですかな」
「それまで、どうしろと」
「アーカトニックの観光をお楽しみ下さい」
「いや、観光つっても此処の特産品や名所は何だ？」
「特産品は山羊と魚と山の幸が名所としては拒風山脈が御座いますな」
「図書館とかは？」
「御座いました…５年程前までは」
「その他は？」
「……」
「……」
「……グゥ」
「寝るなぁぁぁぁぁ！え？本当に何も無い？」
「巷では〝炭坑の無いユースウェル〟〝羊の無いリゼンブール〟と呼ばれ、都市面積だけは大きい街で御座います…お、駅に到着致しましたな」
「何だそれは！出がらしかここは！」

「（駅員に）オーイ、此処にはなんぞ、変わったものは無かったかいのう」
「変わったもの？インマス地区のミスカム館じゃ駄目なのいかい？」
「おお、そういえばあそこは十分特異な所だったな…というわけで、ミスカム館などは如何で御座いましょう」
「いや、ミスカム館てなに」
「私の友人の家で御座います。」
「チョットマテ友人の家がどうして〝特異な所〟なんだ？」
「住人が不思議な人物であることと奇怪な書物があるからですな。」
「奇怪な書物ねぇ…、危険な人物では無いんだよな。」
「奇人ではありますが、悪党では御座いません。」

「まぁいいか、インマス地区のミスカム館だっけ？行ってみることにするよ。」
「それでは、此方から連絡しておきます、それと、これが地図で御座います」
「おっ気が利くねぇ、そんじゃ行くとしまs…どうしたんだアル、部屋の隅なんかで膝をかかえて」
『完全に空気だった……』

「しっかし、本当に何も無い街のようだな」『駅で買った本（〝よくわかるアーカニックの歴史〟著ハロルド・P・ラムクラフト）によると、16年前までは近辺のイルエル湖での漁業と拒風山脈の鉱山でそれなりに栄えていたみたいだね』
「それが16年前の大地震の影響か、鉱山には有毒性のガスが充満し、環境の変化か食用の魚は居なくなった結果が、このゴーストタウン一歩手前か」『まあ、たまに生物学者やキメラ系統の錬金術師がくるから辛うじて踏み止まっているみたいだね。あと、これから行く［ミスカム館］の住人も錬金術じゃないかと言われているとか』
「え？初めて聞いたぞそんなこと、何処で聞いたんだ？」
『（［よくわかるアーカトニックの歴史］を手渡して）ほら、此処』
「おお、本当だ…これは思ったより期待できるかもな」

そうしているうちに、二人はインマス地区ミスカム館に到着したのであった。

序章その２（後書き）

次辺りで主人公の御披露目予定

第一章その１

インマス地区にミスカム館という屋敷がある。築７０年ともそれ以上とも言われる見るからに歴史が有りそうな屋敷で、今年還暦を迎える私が子供の時にはもう有ったような気がする。しかし、奇妙な事に２０年ほど前に撮られた街の写真にはこの屋敷を写している物が一枚も無いのである。～［インマスの怪］著ハリス・Ｐ・ロードレック～

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「［鋼の錬金術師］エドワード・エルリック君と、その弟アルフォンス・エルリック君だね。ハロルドから話は聞いているよ、ミスカム館へようこそ」

「あ、どうも」｛ハロルド？｝

『お邪魔します』｛あの車掌さんの名前じゃないかな｝

館を訪れた二人を、出迎えたのは、筆のような口髭を蓄えた三十路後半位の男性だった。

男はレオン・コーネリウスと名乗り、自分がこの館の主人であると兄弟に告げた。

「彼の言う話では、なんでも、うちの蔵書に興味が有るようじゃないか。そこで、今から書庫に案内しようと思うがどうだね？」

『え…良いんですか？』

「もともと、うちの書庫は公開しているのだから、駄目な訳が無いだろう。しかもかの有名なエルリック兄弟が利用した、となれば箔もつくしな。あと私からの感謝の気持ちというのもある」

「感謝？」

「リオールのレト教とやらの悪事を見抜いたのは、お前達なのだろう？私はこれでも聖職者の端くれだからな、あのようなインチキ宗教を潰してくれた事は喜ばしい事なのだよ」
「セイショクシャねぇ…」
「うむ、知識を奉ずる神［キルヒア］に仕えておる。あぁ、別に布教しようとなどは思ってもいないし、教典等があるのは私の自室だ。書庫の中にはないよ。」

しばらく歩いていくと、男は“３”と書かれたプレートが貼られている扉の前で止まった。

「そして、此処が専門書の類いを収めた第三書庫だ。来た道を戻ると、物語や詩集等がある第一書庫、料理本やらの趣味・実用書などがある第二書庫が。トイレは第一書庫の隣で、第二書庫の脇にある食堂の物は自由にして良い。私はこれから礼拝の準備があるから失礼するが、何か聞きたいことはあるかね？」
『いえ、有りませんが…すみません、何から何まで』
「何、気にすることはない。さっきも言ったが、私は知識神の神官だ。“真理”を追い求める者を援助するのは、当然の事なのだよ。」
『そういえば［きるひあ］でしたっけ、どんな神様なんですか？』
「じゃあ、簡単に説明するとしよう。
賢神［キルヒア］が美とする物は【謎を探求し、知識を研鑽する】事だ。それ故、生涯を通して学習し続け、謎を放置しない事を奨励している。また、研究室に籠り続けるのではなくフィールドワークを推奨しているな。あと、聖印として、このような透明な水晶の玉を使用する。…こんなところか」
「ふーん、“世界を創った”だの“全知全能”だの御大層な事は言わないんだな」
「賢神だけに全知はあるかもしれんが、全能とは言えんな。なんせこの聖印は魔除けには使えない。まぁ宗教の話はきりがないからこ

れくらいにしておこうか。…ああ、そうそう。書庫の奥にある扉は私の自室のだから開けないでくれたまえ」
「それもそうだな。それでは、遠慮せずに拝見させて頂きますか」

ミスカム館第三書庫の蔵書は錬金術に限らず、医学・歴史学・地政学・生物学・神秘学・工学・軍事…と多岐に渡り、量も質も一個人としてはかなりの物である。なれば、錬金術関連の本だけを見ていくのが道理であるだろう。
しかし、分類は疎か書棚から本が溢れだし、巻数も整えられていない有り様では、非効率的であるとは知りつつも、運を天に任せ、適当に本の山から引き抜いて読む、という作業を繰り返すほか無かったのであった。

そして、如何なる運命の悪戯か、それとも、これっぽっちも神様を信仰していないエドに神様が嫌がらせをしたのか、日が暮れる時間になってもめぼしい本どころか、錬金術の本さえ見つけることはできなかったのである。

番外編　ゴドウィン・アンブリッジの手記（前書き）

過去のお話です。

番外編　ゴドウィン・アンブリッジの手記

１９０８年６月１９日
今日、アーカトニックの街に着いた。
この街の近辺には、廃坑から漏れ出た化学物質のせいか、極めて特殊な生物が生息しているのだという。
その生物で合成獣を錬成すれば、どのような合成獣が出来るのであろうか、今から楽しみである。
　ホテルを見つける事は出来なかったが、幸運な事にこの街一の生物学者だという、アンブローズ・デクスター博士の館を間借りする事ができた。
アンブローズ・デクスター博士は口髭をたくわえた壮年の男性で、彼の知性と蔵書は目を見張る物がある。
酒癖と音楽の嗜好の悪さもまた、そうであるが。あの前衛的すぎるバイオリンとフルートはなんとかならない物であろうか。まぁ、それを除けばいい人ではある。
いや、人の厚意に甘えておいて、こんなことを言うべきではないな。
それはともかく、いよいよ明日から探索である。
楽しみだ、嗚呼本当に楽しみだ。

１９０８年６月２０日
今日、イルエル湖北東部にて幾つかのサンプルを採取する事ができた。それにしてもイルエル湖は不気味な所だ。
湖の周囲には一本の草木もなく、魚を狙う水鳥の影もない。
ただただ、気持ちが悪いほど魚がいるだけである。

これも、鉱毒のせいなのだろうか。
それならば、何故魚は生きることが出来るのか。
疑問の種は尽きない。

ここは一旦セントラルに帰って、防毒マスクでも取ってくるべきか、国家錬金術師としての権力を利用すれば、容易いことだろうし。
いや、帰るのはもう少し採取してからにしよう。

そういえば、今日の夕食にニグラトフ風とか言うあまり聞きなれない羊料理をご馳走になった。その後の蜂蜜酒といいこの街には独特の食文化があるようだ、旨かったが。

１９０８年６月２１日

昨日、湖には魚以外の生物はいないと書いたが、さっそく訂正しなければならない。
何故なら、湖の中央部辺りに突き出た岩影に何か動く物があったからだ。
成人男性ぐらいの大きさがあったが、あれは一体なんだったのだろう。
白い蜘蛛みたいなのも見掛けたし、鉱毒に耐える生物は意外と多いのだろうか。

本日の夕食には、サイクラーノシュ風キノコのソテーという物が出た。酒にも合うし、美味い、美味いのだが、にぐらとふやさいくらーのしゅとはなんなのであろうか。

１９０８年６月２２日

１９０８年６月２３日

恥ずかしながら、昨日は二日酔いでダウンしていた。
あの蜂蜜酒は水のように軽く飲めるのだが、キツイ酒のようだ。
それにしても、二日酔いで幻覚を見るなんてこともあるのだろうか。
あぁ、頭がイタイ…
今日は、もう寝るとしよう。

１９０８年６月２４日

デクスター博士の館は立派だが、けっこうあちこちにガタがきているようだ。本日は、生憎天候が優れなかったので、館の中を探索したのだが、普段目にする所ーエントランスや食堂や書庫等ーはともかく、奥に行くと壁の中から何かが走る音が聞こえたし、屋根裏部屋に続くとおぼしき階段には、手摺がなかった。

この街に滞在できるのは、後３日程だから、明日からは出来るだけ多くのサンプルを採取するとしよう。

なんでよりによって今に軍からの出頭命令が出るんだか。

１９０８年６月２５日

今日は、南西部を探索してみた。ここも東側と同じく普通の動植物はなかった、居るものもだが。
やはり軍からの用事を済ませたら防毒マスクを一つ掻っ払って鉱山に突入するべきだろうか？

そういえば、夕食の後で博士に「にぐらとふ」や「さいくらーのしゅ」について聞いてみたところ、サイクラーノシュは遠い場所の名で、ニグラトフとは知り合いの名前なのだそうだ。

１９０８年６月２６日

北西部を探索、特筆すべき事は無し。湖の水を採取。

明日にはここを離れなければならない。
名残惜しいが、国家の犬としてはは従うしか無い。
この事を博士に話した所、選別として学術書を一冊渡してくれた。
セントラルでは見たことが無いと思ってみると、どうやら、博士自身が書いた本のようである。今時珍しい肉筆で書かれており、このあたりの文化・風俗・歴史について書いてあった。私の研究には役に立たないかもしれないが、読み物としても中々面白そうである。

それよりも、どうやってこのサンプルをもって帰ろうか…

１９０８年６月２７日

今、セントラルへ向かう汽車の中でこれを書いている。
ちなみに、サンプルも同じ汽車で運ばれている。博士にはもう足を向けて寝ることは出来そうに無い。

とにかく、セントラルに戻って軍の用事を済ませたら研究だ、忙しくなるだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0718p/

アルケミーワールド2.0

2011年10月8日08時37分発行